



甲
第
十
二
卷

リ 5
16
2



伊弉門
16
卷 2

國史攬要卷之二

並間

○天智天皇

諱ハ天命開別尊

舒明天皇ノ太子ナリ、母ハ皇極天皇初ノ中大兄下稱ス、

○壬戌ノ歲、正月、皇太子、素服シテ軍國ノ事ヲ治ム、帝性

至孝、先帝崩スルノ後、太子ト稱スル者六年、○百濟ノ鬼

室福信ニ、糧仗布帛ヲ給シ、周留城ニ據リ、我兵ト同シク

進テ唐及ヒ新羅ノ兵ヲ破ル、○癸亥ノ歲、夏、我兵新羅ヲ

伐テ一城ヲ拔ク、己ニシテ豊璋、福信カ權ヲ專ニスルカ

ト猜ヒ之ヲ殺ス、故ヲ以テ將士和セス、唐ノ將劉仁軌等、



○天智

國史攬要

卷二

機ニ乘レテ水陸並ヒ進ミ、周留城ヲ攻ム、我兵之ヲ白江口ニ拒ム利アラズ、秦田來津之ニ死ス、豊璋遂ニ城ヲ棄テ高麗ニ逃レ百濟込フ、諸將師ヲ班ス、○甲子歲、皇弟大海人皇子ニ命シテ、冠位ヲ改増セシメ、二十六階トナス、又筑紫ノ水城ヲ興シ、烽候ヲ壹岐對馬ニ置ク、○乙丑歲、百濟歸化ノ男女、二千餘口ヲ東國ニ分チ處ラシム、○丁卯歲、都ヲ近江ノ滋賀ニ遷ス、冬、大和ノ高安、讚岐ノ屋島對馬ノ金田ニ城ク、○元年、春、正月、天皇位ニ即ク、○三韓入貢ス、越ノ國ヨリ、燃ル土、燃ル水ヲ獻ス、蓋シ石炭及ヒ石腦油ナリ、○新羅ノ妖僧、熱田ノ神劔ヲ盜ミ、其國ニ奔

ラントス、風雨晦冥、迷テ行トヲ得ス、終ニ劔ヲ置テ去ル、○二年、十月、中臣鎌足疾アリ、天皇就テ之ヲ問ヒ、尋テ大織冠ヲ授ケ、姓ヲ藤原ト賜ヒ、内大臣ニ拜ス、是月、薨ス、鎌足博學ニシテ、器略アリ、律令制度、多ク其手ニ出ツ、薨スルニ及テ、帝尤モ悼惜ス、○四年、正月、皇子大友ヲ以テ、太政大臣ト爲シ、蘇我赤兄ヲ左大臣ト爲シ、中臣金ヲ右大臣ト爲ス、○十月、天皇疾篤シ、皇弟大海人ヲ召ス、蘇我安麻呂、私カニ皇弟ニ謂テ曰、顧命ニ答ル宜ク意ヲ加フヘシ、皇弟領シテ入ル、帝屬スルニ後事ヲ以テス、皇弟疾ト稱シテ固辞シ、僧ト爲ントテ請フ、帝之ヲ聽ルシテ、袈裟

ヲ賜フ、即チ祝髮シテ遂ニ吉野ニ入ル、時人曰虎ヲ山ニ放ツカ如シト、於是大友皇子ヲ立テ皇太子ト爲ス、○十二月三日、天皇崩ス、壽五十八、帝學ヲ好ミ治體ニ明カニ、其經緯スル所、規模宏遠、稱シテ中宗ト爲ス、

○弘文天皇 諱ハ大友明治三年謚号ヲ奉ス

先帝ノ太子ナリ母ハ宅子媛、○十二月、天皇位ニ即ク、近江滋賀宮ニ在リ、天皇容貌魁偉ニシテ、眼光人ヲ射ル、唐人使者劉德高嘗テ稱シテ曰、皇子風骨非常、真ニ天上ノ人ナリト、○元年、壬申ノ六月、大海人皇子、兵ヲ吉野ニ稱ケ、東シ美濃ニ出テ將士ヲ分テ、不破鈴鹿倉屋ノ三道ヲ

塞キ、大伴吹負ハ大和ニ留テ之ニ應ス、朝廷大ニ震シ、急ニ使ヲ諸國ニ遣テ兵ヲ徵ス、穗積百足、物部日向、大和ノ留守高坂上ト、大和京ノ西ニ陣シテ、兵器ヲ朝廷ニ送ル、己ニシテ百足吹負ノ爲ニ欺キ殺サレ、日向モ亦擒トナリ、高坂王遂ニ吉野ニ降ル、七月、朝廷壹岐韓國大野果安ヲ遣テ吹負ヲ拒ミ、乃樂山ニ戰テ之ヲ破ル、又山部王及ヒ蘇我果安、巨勢人ヲ遣テ不破ヲ襲ハシム、諸將和セス、軍遂ニ潰ユ、於是大海人皇子、伊勢ノ兵ヲ遣テ吹負及ヒ村國男依等ヲ助ケ、三道ヨリ並ヒ進ム、韓國敗レテ走リ、境部藥素友足等男依ト戰ヒ敗レテ死ス、吹負男依進テ

瀬田ニ至ル、帝衆ヲ悉シテ橋西ニ軍シ、旗幟野ヲ蔽フ、官軍ノ將智尊、精銳ヲ率テ先鋒トナリ、橋ヲ撤シテ之ヲ拒ク、已ニシテ戰死シ、犬養五十君、谷塩手等、粟津ニ戰テ敗レテ死ス、官軍大ニ敗レ、諸大臣皆逃ル、帝、物部麻呂ト走テ、山前ニ崩ス、壽二十五、時ニ七月廿三日ナリ、帝、明悟學ヲ好ム、嘗テ宴ニ侍シテ詩ヲ献ス、曰、皇明光日月、帝德載天地、三才並泰昌、萬國表臣儀、本朝ノ詩此ヲ始ト爲ス、帝才藝多シ、然レ頗ル人ニ驕ル、故ニ人心服セス、藤原鎌足其舅ナリ、屢々之ヲ諫ム用ヒス、遂ニ此ニ及ブ、○八月、大海人皇子、朝臣ノ罪ヲ議シ、中臣金ヲ斬リ、蘇我赤兄、巨勢

入等ヲ流シ、其餘ハ悉ク之ヲ赦ス、

○天武天皇 諱ハ天渟、中原瀛真人

天智天皇ノ同母弟ナリ、初メ大海人皇子ト稱ス、○元年、二月、天皇飛鳥ノ淨見原宮ニ於テ即位、○二年、對馬白金ヲ貢ス、銀錢ヲ造ル、○九年、詔シテ帝紀及ヒ上古以來ノ事ヲ撰シム、○十年、境部石積等ニ勅シテ、新字四十四卷ヲ造ラシム、○四月、詔シテ男女ヲシテ始テ髮ヲ結ハシム、○九月、勅シテ跪礼匍匐ノ礼ヲ停メ、難波ノ朝廷ノ立礼ヲ用テ、○十二年、詔シテ親王及ヒ諸臣文武ノ官ヲシテ、務テ軍事ヲ習ヘ、兵馬器械ヲ具ヘシム、馬有ル者ハ騎

タリ、馬無キ者ハ卒タリ、時ヲ以テ檢閲ス、○十月、天下諸民ノ族姓ヲ改メ、定テ八等ト爲ス、曰真人、曰朝臣、曰宿禰、曰忌寸、曰道師、曰臣、曰連、曰稻置、○朱鳥元年、大和ヨリ赤雉ヲ獻ス、因テ元ヲ改ム、○九月九日、天皇崩ス、壽六十五、帝英武ニシテ、天文推步遁甲ノ術ニ通ス、佛ヲ好ミ、又神祇ヲ敬シ、祭祀ノ礼多ク、帝ヨリ始ル、

○持統天皇 諱ハ高天原廣野姫尊

天智帝第二ノ皇女、母ハ遠智媛、先帝ノ皇后ナリ、深沈ニシテ、大度アリ、先帝ノ兵ヲ稱ルヤ、常ニ謀議ニ參與ス、是ニ至テ皇太子ヲ輔ケ、朝ニ臨テ制ヲ稱ス、○冬、大津皇子

罪アリテ死ヲ賜フ、皇子容貌魁岸、天智帝之ヲ愛シ、先帝亦政ヲ聽シム、皇子學ヲ好ミ、士ニ下ル、士多ク之ニ歸ス、新羅ノ僧行心、其骨法ヲ稱シ、竊ニ勸テ及ヲ謀ラシム、事露ハレテ死ヲ賜フ、行心ヲ飛彈ニ流ス、○四年夏、皇太子草壁薨ス、○元年正月、天皇位ニ即ク、七月、高市皇子ヲ以テ太政大臣ト爲ス、○二年皇女ニ内親王ヲ賜ヘ、命婦ニ位階ヲ授ク、女官ヲ置ク、此ニ始ル、○三年三月、伊勢ニ行幸ス、中納言三輪高市麻呂、上表シテ其農時ヲ妨ルヲ諫ム、納レス、車駕過ル所諸國ノ調役ヲ免ス、○七年高市皇子薨ス、○八年百官ヲ召シテ建儲ヲ議ス、衆議久ク決

セズ、葛野皇子進テ曰、開國以來子孫相養ク、若シ兄弟相及ホス時ハ、乱此ヨリ起ル、今先太子ノ子珂瑠王在リ、誰カ敢テ間然セシト議乃チ定ル、葛野皇子ハ弘文帝ノ子ナリ、○八月、天皇位ヲ皇太子ニ讓ル、大寶二年十二月廿二日崩ス、壽五十八、

○文武天皇 諱ハ天之真宗、祖父尊

天武天皇ノ皇孫ニシテ、草壁太子ノ皇子ナリ、母ハ元明天皇、初ノ珂瑠王ト稱ス、○元年八月、天皇位ニ即ク、○二年、始テ答法ヲ定メ、博戲游手ノ徒ヲ禁ス、○三年、役小角ヲ伊豆島ニ流ス、小角大和ノ人、咒術ヲ善シ、鬼神ヲ役ス、

其弟子韓國廣足、ソノ能ヲ忌テ之ヲ譖ス、是ニ至テ流サ
ル、○大寶元年正月朔、天皇大極殿ニ御シテ朝賀ヲ受ク、
蕃客亦タ位ニ陪ス、朝廷ノ禮儀、於是大ニ備ハル、二月、始
テ大學寮ニ釋奠ス、三月、對馬ヨリ金ヲ貢ス、因テ改元ス、
○官位ヲ改制シ、位冠ヲ賜フヲ停メ、易ルニ位記ヲ以
テス、○二年、始テ岐蘇ノ山道ヲ闢ク、○三年十二月、持統
天皇ヲ葬ル、始テ火葬ヲ用フ、先是四年僧道照死ス、遺言
シテ栗原ニ火葬ス、火葬此ニ始リテ、終ニ至尊ニ及ブ、是
ヨリ歷世相養ケ、天下俗ヲ成ス、○慶雲元年七月、粟田真
人等唐ヨリ還ル、真人長安ニ在リ、唐主武后之ヲ麟德殿

ニ宴ス、真人學ヲ好ミ文ヲ能シ、進止容有リ、唐ノ君臣之ヲ稱シテ曰、君子國ノ名虚シカラスト、○四年、六月十五日、天皇崩ス、壽廿五、帝博ク經史ニ涉リ、心ヲ政事ニ留メ、人民ヲ賑恤シ、孝順ヲ旌表シ、天下其澤ヲ蒙ル、皆享年永カラサルヲ惜ム、

○元明天皇

諱ハ日本根子天津御代豊國成姫尊

天智天皇第四ノ皇女、先帝ノ母后ナリ、群臣遺詔ヲ奉シテ踐祚ヲ請フ、○慶雲四年、七月、天皇太極殿ニ於テ即位、○和銅元年、武藏ノ國銅ヲ献ス、因テ元ヲ改ム、武藏ノ國今年ノ庸ヲ免ス、○八月、銅錢ヲ製ス、和銅開珍ト曰フ、○

三年、三月、都ヲ平城ニ遷シ、左右京坊ヲ置ク、○五年、太安

麻呂古事記ヲ撰テ之ヲ上ル、○秋、大ニ稔ス、大赦シテ諸

國ノ租ヲ免ス、○八年、國司郡司ニ詔シ、治ノ殿最ヲ三等

ト爲シ、百姓ノ流凶、十人以上ヲ致ス者ハ任ヲ解カシム、

○九月、天皇位ヲ皇女一品氷高内親王ニ讓ル、養老五年、

十二月七日崩ス、壽六十一、

○元正天皇

諱ハ日本根子高瑞淨足姫尊

文武天皇ノ皇姊ナリ、一諱ハ氷高、○靈龜元年、九月、天皇位ニ即キ元ヲ改ム、○國司ニ詔シ、民ヲシテ陸田ニ耕シ、禾麥雜穀ヲ種シム、○八年、下道真備、阿部仲磨呂、僧玄昉

等唐ニ入テ留學ス、○養老元年、美濃ニ行幸シ、當耆郡ノ
醴泉ヲ觀ル、初ノ郡ニ樵夫アリ、父ニ事テ孝、父酒ヲ嗜ム
薪ヲ賣テ纔ニ給ス、一日山ニ入り、岩谷ノ間ニ醴泉ヲ得
タリ、芳烈酒ニ同シ、大ニ喜ヒ、日々汲テ父ヲ養フ、是ニ至
テ車駕郡ニ過テ之ヲ觀ル、以爲ラク孝感ノ致ス所ナリ
ト、其泉ヲ名ケテ養老ト曰フ、因テ元ヲ改メ樵夫ニ官ヲ
授ク、○三年、二月、始テ天下ノ百姓ヲシテ衽ヲ右ニセシ
ム、始テ婦女ノ服制ヲ定ム、○秋、始テ按察使ヲ置テ諸國
ヲ巡省セシム、○四年、五月、舍人親王、日本書紀ヲ撰テ成
ル之ヲ上ル、凡三十卷、○八月、右大臣藤原不比等薨ス、不

比等ハ内大臣鎌足ノ子、四朝ニ歷事シ、文武帝其女ヲ娶
ル、薨スルニ及テ太政大臣正一位ヲ贈ル、聖武帝ノ時ニ
近江ニ追封シ淡海公ト曰フ、○七年、漆部司令史文部石
勝罪アリテ流ニ當ル、其子祖九年十二、安頭ハ九歲、乙丸
ハ七歲、闕ニ詣リ奴ト爲テ父ノ罪ヲ贖ニテヲ請フ、其孝
志ヲ感シ、詔シテ石勝ヲ宥ス、○八年、二月、天皇位ヲ皇太
子ニ讓ル、

○聖武天皇

諱ハ天璽國押開豐櫻彦尊

文武天皇第一ノ皇子ナリ、母ハ夫人藤原氏、○神龜元年、
二月、天皇位ニ即キ元ヲ改ム、○四月、蝦夷叛ク、式部卿藤

國史

卷二

○聖武

八

原宇合ムカヒヲ以テ大將軍ト爲シ之ヲ討ツ、坂東九國ノ兵三萬ヲ發シ騎射ヲ習ハシム。○十二月、宇合等還ル、是歲鎮守府將軍大野東人アノノヒト多賀城ヲ築ク。○天平元年、二月、左大臣長屋王ヲ殺ス、王ハ高市皇子ノ子、學ヲ好ミ詩文ヲ善クス、名流多ク其門ニ遊フ、私カニ不軌ヲ謀ルト告ル者アリ、卽夜ニ兵ヲ發シテ其弟ヲ圍ミ死ヲ賜フ、後其從士大伴オホトモ子蟲コムシナル者、中臣東人ナカノミチノアサヒトヲ殺シテ曰、吾主ヲ誣告ス、故ニ仇ヲ報スト。○二年春、太政官奏ス、大學ノ生徒成達スルヲ能ハサルハ、實ニ窮困ニ由ル、請フ才學優長ナル者ヲ選ミ、衣食ヲ給シテ之ヲ勸誘セシ、又奏ス、諸蕃異域風

俗同レカラス、譯語無レハ以テ事ヲ通シ難シ、子弟ヲシテ專ラ漢語ヲ學ハシメント、並ニ之ヲ許ス。○七年春、遣唐大使還ル、學生下道真備マキベ僧玄昉等偕ニ至ル、孔子ノ像及ヒ曆樂ノ書佛經ヲ獻ス。○十一月、知太政官事舍人親王薨ス、親王ハ天武帝ノ第三子、清原氏ノ祖、其後世々明經博士タリ。○是歲夏ヨリ冬ニ至テ痘瘡始テ行ハレ、天下死スル者多シ。○十二年冬、太宰少貳藤原廣嗣兵ヲ舉テ僧玄昉等ヲ誅セント欲ス、朝廷兵ヲ遣テ之ヲ討テ廣嗣ヲ斬ル、初メ僧玄昉電ヲ太后ニ受ケ、僧正ト爲テ内道場ニ居リ又皇后ニ電アリ、屢說法ト稱シテ近侍ス、頗ル

醜聲アリ、下道真備中宮亮トナリ敢テ言ハス、廣嗣之ヲ
惡ミ玄昉ヲ奏劾ス、及テ太宰府ニ貶セラル、廣嗣ノ妻美
ナリ、玄昉之ニ姦セントス可カズ、書ヲ以テ太宰府ニ告
ク、廣嗣怒リ上表シテ玄昉真備ノ姦ヲ斥ス、遂ニ兵ヲ舉
テ之ヲ誅セント欲ス、朝議以テ謀反トナシ、大野東人等
ヲ遣リ、兵一萬七千ヲ率テ之ヲ討ツ、廣嗣兵一萬ヲ發シ
テ板イタヒ匱川ニ至ル、官軍ノ先鋒佐伯常人呼テ曰、反逆ニ從
フ者ハ族誅スト、廣嗣馬ヲ下テ拜シテ曰、敢テ反スルニ
非ス、姦臣ヲ誅セント欲スル耳、常人曰、官符ヲ矯テ兵ヲ
發ス反ニ非スシテ何ソ、廣嗣對ヘスシテ退ク、其軍遂ニ

潰ユ、廣嗣肥前ニ走リ遂ニ捕斬セララル、後七年玄昉筑紫
ニ謫セラレテ死ス、世以テ廣嗣ノ崇トナス廣嗣ハ宇合
ノ子ナリ、○十五年、筑紫鎮西府ヲ建テ將軍ヲ置ク、○天
平感宝元年、二月、陸奥ヨリ黄金ヲ貢ス、因テ元ヲ改メ其
國ノ庸調ヲ免スル、二年、○秋七月、天皇位ヲ皇太子ニ
讓ル、帝篤ク佛ヲ信シ位ヲ遜レ髮ヲ削リ、自ラ三宝奴ト
稱ス、天平勝宝八年、五月二日崩ス、壽五十六、

○孝謙天皇 諱ハ阿閉

聖武天皇第一ノ皇女、母ハ皇后藤原氏、右大臣不比等ノ
女、○天平勝宝元年、七月、天皇位ニ即キ元ヲ改ム、○九月、

始テ紫微中臺ヲ置キ、藤原仲麻呂ヲ以テ紫微令トナス、仲麻呂姿儀美ナルヲ以テ電ヲ受ク、○四年四月、東大寺ニ行幸ス、百官ノ儀衛正朝ノ如シ、僧一万人ヲ召シ、大ニ齊會ヲ設ク、前後行幸スル者屢ヒ、○天平宝字元年、三月、皇太子道祖王ヲ廢シ、大炊王ヲ立ツ、王ハ舍人親王ヲ子仲麻呂ニ善シ、其女ノ寡居スル者ヲ納レテ妃トナス、故ニ仲麻呂之ヲ立ツ、其兄右大臣豐成、之ヲ争フ聽カス、○七月、橘奈良麻呂ヲ獄ニ下ス、奈良麻呂ハ諸兄ノ子、仲麻呂ノ專權ヲ憤リ、故ノ太子及ヒ黃文王安宿王、小野東人、大伴古麻呂等ト、廢立ヲ謀ル事露ハレテ罪ニ抵ル、故ノ

太子、黃文王、東人、古麻呂等ヲ杖殺シ、安宿王ヲ佐土ニ流ス、連坐シテ罪ヲ得ル者、二百六十餘人、仲麻呂又タ其兄豐成ヲ誣テ太宰師ニ貶ス、是ヨリ仲麻呂ノ威中外ニ震フ、○二年、八月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、

○淳仁天皇 諱ハ大炊明治三年七月謚号ヲ奉ス

天武天皇ノ皇孫ニシテ、舍人新王ノ皇子ナリ、母ハ大夫人當麻氏、○天平宝字二年、八月、天皇即位詔シテ官名ヲ改ム、藤原仲麻呂ヲ以テ太保トナシ、姓名ヲ惠美押勝ト賜フ、○十月、詔ス國司ノ交替六年ヲ限トナシ、三年毎ニ巡察使ヲ遣テ治績ヲ檢校ス、○三年、諸國ニ敕シテ常平

倉ヲ置ク、○六月、舍人親王ヲ追尊シテ崇道盡敬皇帝ト爲ス、○五年、十一月、惠美朝イカク、百濟敬信キョウシン、吉備真備キムノヒトヲ以テ東海南海西海諸道ノ節度使トナシ、兵艦四百艘、兵四万余ヲ點シテ戰ヲ習ハシム、新羅礼ヲ欠クヲ以テ之ヲ征セント欲スルナリ、○七年九月、僧道鏡ヲ少僧都ト爲ス、道鏡ハ河内ノ人、少シテ禪行ヲ以テ聞ユ、先是内道場ニ入テ上皇ニ電アリ、帝屢之ヲ言フ、上皇悦ヒス、遂ニ帝ト隙アリ、○八年九月、惠美押勝反シ、誅ニ伏ス、押勝僧道鏡ノ已レカ電ヲ奪フ、懼レ、之ヲ誅シテ上皇ヲ幽セシメ、謀リ、乃チ上皇ニ諷シテ諸國ノ都督兵事使トナリ、武

ヲ閱スルニ託シテ、更番集習セシム、私カニ其數ヲ倍シ、太政官ノ印ヲ用テ之ニ下ス、已ニシテ事露ハレ、詔シテ押勝カ官位ヲ削リ、兵ヲ遣テ三關ヲ守ル、押勝遂ニ近江ヨリ高島ニ走リ、兵數千ヲ募リ、塩燒王ヲ奉シテ主ト爲ス、上皇藤原藏下麻呂ニ敕シ、兵ヲ率テ之ヲ討ツ、押勝戰テ敗レ、遂ニ捕斬セラレ、塩燒王亦殺サル、○藤原豐成ヲ召シ、還シテ右大臣ト爲ス、豐成寬厚ニシテ時望アリ、○初メ帝、押勝ニ因テ立ツヲ得タリ、此ニ至テ太上皇帝ヲ以テ押勝ニ黨スト爲シ、十月、兵ヲ遣テ中宮院ヲ困シ、帝ヲ廢シテ淡路公ト爲ス、帝外戚兩三人ト歩シテ、圖書

寮ノ北ニ出テ宣詔ヲ受ク、遂ニ淡路ニ徙シ一院ニ函ス、
天平神護元年、十月廿三日崩ス、壽三十三、

○稱徳天皇 孝謙帝ノ重祚

天平神護元年、正月帝再ヒ朝ニ臨キ元ヲ改ム、○二月詔
シテ人臣私ニ兵仗ヲ蓄ルヲ禁ス、○八月、兵部卿和氣王
罪アリ死ヲ賜フ、○閏十月、道鏡ヲ以テ太政大臣禪師ト
爲シ、百官ヲシテ拜賀セシム、○二年、十月、道鏡ニ法王ノ
位階ヲ賜フ、正一位ノ上ニアリ服食ニテ供御ニ準ス、右
大臣藤原永手ヲ左大臣ト爲シ、吉備真備ヲ右大臣ト爲
ス、帝東宮ニ在ルキ真備侍讀タリ、○神護景雲元年、二月

帝大學ニ臨テ釋奠ス、真備其儀ヲ制ス、○三年正月、大臣
以下ノ百官道鏡ニ朝ス、○秋八月、從五位下和氣清麻呂
ヲ大隅ニ流ス、先是宇佐ノ神官阿曾麻呂、道鏡ニ阿諛シ、
神敕ニ託シテ曰、位ヲ道鏡ニ禪レハ、天下太平ナリト、帝
乃チ清麻呂ヲシテ宇佐ニ至リ奉幣セシム、發スルニ臨
テ道鏡人ヲ退ケ清麻呂ニ謂テ曰、予祚ニ登ラハ汝ヲ以
テ大臣ト爲シ、否ラサレハ劔有ルノミト、声色俱ニ厲シ、
清麻呂退ク其友路豐永之ニ謂テ曰、此事極テ重大ナリ
子之ヲ勉ヨ、清麻呂曰、死ヲ以テスヘシト、已ニシテ復命
シ神敕ヲ奏シテ曰、我カ國開闢以來、君臣ノ分定リ、天日

嗣必ス皇裔ヲ以テス、臣ニシテ天位ヲ望ム者ハ、速カ
ニ誅戮ヲ加ヘヨ、百官色ヲ失フ、道鏡面色如火ノ如ク怒テ
奏シテ曰、妄言不敬ナリト、其官職ヲ奪ヘ、名ヲ穢麻呂ト
改メ大隅ニ流ス、道鏡人ヲ遣リ之ヲ途ニ殺ストス、雷雨
晦冥ニ逢テ果サス、敕使亦來リ免ル、ヲ得タリ、配所ニ
至ル藤原百川其俸ヲ分テ之ニ給ス、○四年八月帝崩ス、
壽五十三、先是由義宮ニ幸シ、道鏡異味ヲ進ム、因テ疾ヲ
得此ニ至テ崩ス、右大辨藤原百川及ヒ左大臣藤原永手、
近衛~~二~~符、藤原藏下麻呂等、策ヲ禁中ニ定メ天智帝ノ皇
孫白壁王ヲ迎テ之ヲ立ツ、

○光仁天皇 諱ハ白壁

天智天皇ノ皇孫ニシテ、志貴親王ノ皇子ナリ、母ハ紀氏、
初メ仲麻呂道鏡、電ヲ恃ニ權ヲ專ニシ、忠良ヲ忌害ス、帝
深ク自ラ韜晦シ、祚ヲ踐ニ及テ即チ道鏡ヲ下野ニ流ス、
曰先帝ノ電スル所誅スルニ忍ヒス、和氣清麻呂ヲ召シ
還シ、尋テ本官ニ復ス、○宝龜元年十月、天皇太極殿ニ於
テ即位元ヲ改ム、○吉備真備ノ中衛大將ヲ罷ム、○是歲、
阿部仲麻呂唐ニ卒ス、仲麻呂唐ニ在ル~~一~~五十年、玄宗其
才ヲ愛シ、秘書監ヲ授ク、王維李白等ト友タリ、曾テ明
州ニ在テ月ヲ望ミ和歌ヲ作ル、今ニ至テ人口ニ膾炙ス、

○四年正月、皇后及ヒ太子、罪アリ廢シテ庶人ト爲ス、藤原百川、山部親王ヲ皇太子ト爲ント欲ス、公卿各異議アリ、帝モ亦未タ決セス、百川執奏スルヲ累日、殿前ニ在テ退カス、帝其誠心ヲ感シテ之ヲ許ス、○三月、天下穀貴シ、使ヲ郡國ニ遣リ、穀ヲ糶シテ民ヲ賑ス、私糶ヲ賤賣スル者ハ位ヲ授ク、○六年八月、先是京官ハ祿薄ク、國司ハ利厚シ、故ニ諸寮ミテ外任ヲ望ム、是ニ至テ諸國ノ公廨四分ノ一ヲ割テ、京官ノ俸ヲ益ス、○九月、前右大臣吉備真備薨ス、當時我カ朝才學ノ士甚タ多シ、仲麻呂真備尤モ名ヲ海外ニ播ス、○十年七月、參議中衛大將藤原百川薨

ス、百川忠烈ニシニ社稷ニ功アリ、帝委ヌルニ腹心ヲ以テス、野史ニ其權變ノ事ヲ載ス、皆誣妄ナリ、○十一年、三月、詔ニテ内外ノ冗官ヲ省キ、諸國ノ冗兵ヲ汰シ、專ラ農耕ヲ務シム、○陸奥ノ夷酋反シ、蝦夷大ニ乱ル、諸將ヲ遣テ之ヲ討ツ、○天應元年、三月、天皇不豫ナリ、位ヲ皇太子ニ禪ル、十二月廿三日崩ス、壽七十三、

○桓武天皇 諱ハ日本根子皇統^{スヘラキタラテル}珍照尊

光仁天皇ノ太子ナリ、母ハ皇太后高野氏、○元年四月、天皇即位、○延暦元年、氷上川^{ヒカミカハツガ}繼反ヲ謀ル、山陵未タ乾カザルヲ以テ、死ヲ免シテ伊豆ニ流ス、○四年九月、盜アリ、中

納言藤原種繼ヲ射殺ス、敕シテ賊ヲ捕フ事、皇太弟ニ連ル、乃チ淡路ニ流シ首惡大伴繼人ヲ誅ス、太弟食ヲ絶テ薨ス、後ニ崇道天皇ト謚ス、○淡海三船卒ス、三船博學文ヲ能シ大學頭タリ、敕ヲ奉シテ神武帝以來列帝ノ謚号ヲ定ム、○七年七月、參議紀古佐美ヲ以テ征東大將軍トナシ、阪東ノ兵五萬二千ヲ發シテ蝦夷ヲ討ツ、○是歲、僧最澄請テ根本中堂ヲ比叡山ニ造ル、号ヲ延曆寺ト賜ス、最澄后ニ傳教太師ト稱ス、○十年七月、大伴弟麻呂、阪上田村麻呂ヲ遣テ蝦夷ヲ討ツ、先是紀古佐美等功無シテ還ル、故ニ是命アリ、明年凱旋ス、○十三年、先是山背ノ葛

野郡、宇太邑ノ地ヲ相テ宮城ヲ營シ、諸國ニ分テ課シテ宮門ヲ造ル、是ニ至テ成ル、十一月、車駕新京ニ遷ル、詔シテ山背ヲ改テ山城ト爲シ平安城ト稱ス、○是歲、田百二町ヲ大學寮ニ増シ、勸學田ト稱ス、○十八年、二月、前豐前守美作備前、國造兼民部大輔、中宮大夫、從三位、和氣清麻呂薨ス、清麻呂抗直ニシテ氣節アリ、庶務ニ練達ス、其任ニ在ルヤ、水利ヲ興シ、義田ヲ闢キ、到ル處ノ民其澤ヲ蒙ル、尤モ古事ニ明カニ、民部省例二十卷ヲ撰フ、後來宇佐ノ奉幣使、必ス和氣氏ニ命ス、蓋シ大功ヲ無窮ニ顯ハスナリ、孝明天皇ノ嘉永四年、正一位ヲ贈リ、護王大明神ノ

神号ヲ賜フ、○二十年、九月、征夷大將軍坂上田村麻呂、蝦夷ノ賊ヲ討テ之ヲ破リ、其首高丸ヲ射殺シ、惡路王ヲ斬ル、蝦夷平ラク、明年膽澤ニ城キ、東國ノ浮浪四千人ヲ配シテ之ヲ戍ル、其首大墓公盤具公衆五百ヲ率テ來リ降ル、田村ノ功ヲ賞シ從三位ヲ授ク、○二十四年、冬、群臣ヲ召テ政事ノ得失ヲ議ス、參議藤原緒嗣奏ス、方今ノ患ハ兵ト土木ニ在リ、請フ二ノ者ヲ罷テ民カヲ紓シ、帝之ヲ嘉シ立トコロニ其役ヲ罷ム、緒嗣ハ百川ノ子ナリ、○二十五年、三月十七日、帝崩ス、壽七十、帝英武ニシテ心ヲ政治ニ勵シ、内興作ヲ事トシ、外夷狄ヲ攘ヒ費用巨多ナリ

ト雖也、後世之賴ル

○平城天皇 諱ハ日本根子天排國高彦尊

桓武天皇ノ太子ナリ、母ハ皇后藤原氏、○大同元年、五月、天皇太極殿ニ於テ即位元ヲ改ム、○六月、諸王及ヒ五位以上ノ子弟ニ教シ、十歳以上ハ皆大學ニ入り、業ヲ分ツテ教習セシム、○二年二月、從五位下齊部廣成古語拾遺ヲ上ル、○十一月、皇弟伊豫親王ヲ殺ス、先是藤原宗成潛カニ王ニ勸テ不軌ヲ謀シム、王拒テ從ハス、已ニシテ事洩ル、宗成誣言ス首謀ハ親王トリト、終ニ之ヲ河原寺ニ幽ス、親王其母藤原氏ト藥ヲ仰テ死ス、時人之ヲ冤トス

宗成等亦貶セラル。○三年五月安部真直出雲廣貞等敕ヲ奉ンテ大同類聚方一百卷ヲ撰之。是に至テ之ヲ上ル。○四年四月天皇不豫也位ヲ皇太弟ニ禪ル。天長元年七月七日崩ス。壽五十一。

○嵯峨天皇 諱ハ神野

桓武天皇第二ノ皇子ナリ平城帝ノ同母弟。○四年五月天皇太極殿ニ於テ即位。○弘仁元年九月藤原仲成反ヲ謀テ誅ニ伏ス。初尚侍藥子上皇ニ電アリ巧媚ニシテ奸其兄仲成勢ヲ恃テ驕恣密カニ上皇ヲ復祚シ已レ后位ニ居リ仲成ニ政ヲ執シメント謀リ都ヲ平城ニ遷ント

ス物議洶然帝怒テ仲成ヲ執ハ藥子カ罪惡ヲ暴白ス上皇兵ヲ發シテ藥子ト同ク東ニ走ル宿衛皆從フ帝阪上田村麻呂文屋綿麻呂ヲ遣テ之ヲ美濃路ニ邀テ上皇進ヲ得ス衆皆潰ユ遂ニ宮ニ還テ雄髮シ藥子藥ヲ仰テ死ス乃チ仲成ヲ誅シ餘ハ赦シテ問ハス。○二年五月大納言兼右近衛大將阪上田村麻呂薨ス田村麻呂ハ弟田麻呂ノ子ナリ赤面黃鬚勇力人ヲ絶キ將帥ノ略アリ喜フキハ老幼親之狎レ怒ルキハ猛獸懼伏ス。○十一月左右衛士ノ府ヲ改テ左右衛門ノ府ト曰フ。後世某左衛門某右衛門ノ稱出ヨリ。○六年畿内及ヒ諸國ニ命シテ茶ヲ植シム。○七

月萬多親王等新撰姓氏錄ヲ撰テ成ル之ヲ上ル、先是帝
神武天皇以來ノ姓氏濫雜ニシテ、尊卑混淆スルヲ憂ヘ、
命シテ之ヲ攷定セシム。○九年三月、朝會及ヒ常服ノ制
ヲ定ム、男女ヲ論セス一々唐制ニ準ス。○四月、殿閣諸門
ノ号ヲ改テ之ヲ榜題ス、帝及ヒ橘逸勢僧空海之ヲ書ス、
世之ヲ三蹟ト曰フ、逸勢空海共ニ唐ニ入り書ヲ善ス。○
十一年、大納言冬繼等、弘仁格弘仁式ヲ撰ム、淡海公ノ撰
スル律令ニ格式ヲ加ヘ、明法ノ學士之ヲ習フ、本朝古ノ
政治此ニ備ハル。○十四年二月、加茂ノ齊院有智子内親
王ノ山莊一幸シテ、宴ヲ開キ花ヲ賞ス、親王詩ヲ献シ帝

大ニ嘆賞ス、親王ハ帝ノ皇女ナリ、時ニ年十七。○四月、天
皇位ヲ皇太弟ニ禪ル、帝博ク經史ニ涉リ、善ク文ヲ屬シ
尤モ草隸ニ妙ナリ、心ヲ民事ニ留メ、賑恤ノ政甚タ多シ、
兼和九年、七月十五日崩ス、壽五十七。

○淳和天皇 諱ハ大伴

桓武天皇第三ノ皇子、母ハ藤原氏。○十四年四月、天皇太
極殿ニ於テ即位。○天長元年、八月、右大臣藤原冬嗣、中納
言良岑安世、參議多治比今麻呂等、國守郡司ヲ撰任スル
法ヲ奏請ス、皆之ヲ許ス。○二年八月、大學ノ昏生ノ紫宸
殿ニ召シテ、經史ヲ講論セシム、後恒例ト爲ス。○三年、清

原夏野奏ス、親王未タ庶務ニ習ハスシテ、八省ノ卿ニ任
ス、官事日ニ墮ル、宜ク先ツ守宰ニ任スベシ、乃チ上総常
陸上野ヲ以テ親王ノ任國ト爲ス、故ニ三國、必有テ○六
年、諸國ニ命シテ、水車ヲ造リ灌漑ニ便ナラシム、○七年
大納言、良岑安世薨ス、安世ハ桓武帝ノ皇子、姓ヲ良岑ト
賜フ、少フシテ騎射ヲ善ス、長スルニ及テ始テ孝經ヲ讀
テ、嘆シテ曰、名教ノ極斯ニ在リト、是ヨリ志ヲ學術ニ篤
フシ卒ニ名臣タリ、○十年、二月、右大臣清原夏世等令儀
解十卷ヲ上ル、夏野等詔ヲ奉シテ諸儒ト論辨折衷スル
所ナリ、○天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、

○仁明天皇 諱ハ正良

嵯峨天皇第二ノ皇子ナリ、母ハ皇后橘氏、○三月、天皇太
極殿ニ於テ即位、○兼和元年八月、紫宸殿ニ釋奠シ自
尚昏ヲ講ス、○二年秋、菅原清公ニ命シテ後漢書ヲ侍讀
セシム、○六年、畿内ニ敕シテ蕎麥ヲ種シム、○八年十二
月、左大臣藤原緒繼等、日本後紀四十卷ヲ上ル、○九年七
月、皇太子恒貞親王ヲ廢ス、先是阿保親王密カニ皇太后
ニ上書シテ、東宮帶刀伴健岑等、太子ヲ奉シテ乱ラ東國
ニ作サントスルヲ告ク、太后藤原良房ヲシテ之ヲ奏セ
シム、兵ヲ遣テ健岑等ヲ執フ、太子惧レテ位ヲ辭セント

請フ、帝許サスシテ曰、事汝ニ關ラスト、既ニシテ飛書アリ語太子ニ關ル、遂ニ兵ヲ遣テ東宮ヲ圍ム、太子晏然トシテ左右ニ謂テ曰、吾元ヨリ此事有ルヲ知ルト、淳和院ニ遷シ降シテ親王ト爲ス、健岑ヲ隱岐ニ流シ、連坐スル者數十人、播逸勢モ亦執ヘラル、鞠問スレモ服セス、伊豆ニ流サル道ニシテ死ス、或ハ云フ、太子ノ廢黜其罪ニ非ス、立テ太子ト爲ルハ、嵯峨上皇ノ意ニ出ツ、上皇崩後三日ニシテ此獄起ル、蓋シ藤原氏ノ徒、其所生ヲ立ント欲シテ之ヲ構陷ス、逸勢ノ服セサル亦以テ其誣ヲ知ル可クシテ、太子亦夕曰、吾元ヨリ此事アルヲ知ルト、當時

ノ情想ヒ見ル可シ、逸勢一女アリ、其流貶ニ當テ悲泣シテ相従フ、護者之ヲ呵シテ去シム、女乃チ晝止リ夜行キ遂ニ之ニ隨フ、逸勢遠江坂莖驛ニ至リ病テ卒ス、女悲慟ニ堪ヘス、落髮シテ墓側ニ庐ス、後詔アリ逸勢ノ罪ヲ赦ス、女大ニ悦ビ、柩ヲ負テ京師ニ歸葬ス、時人之ヲ稱ス、十三年、參議和氣真網卒ス、清麻呂ノ弟五子ナリ、學ヲ好ミ三朝ニ歷仕ス、嘗テ訟獄ノ不平ヲ見テ嘆シテ曰、塵起ルノ路行人目ヲ掩フ、枉判ノ場孤直何ソ益アラント、職ヲ辞シテ卒ス、真子清麻呂
○嘉祥二年冬、帝京師ヲ巡視シ、獄前ヲ過ク是レ誰レカ家ソト問フ、右大臣良房奏シ

テ曰囚獄司ナリ帝憫然トシテ盡ク囚徒ヲ放シム○三年三月廿一日帝崩ス壽四十一帝博ク衆藝ヲ綜ヘ最モ經史ヲ好シ書ニ工ナリ先帝ノ草書ヲ學フ人別ツテ能ハス

○文德天皇 諱ハ道安

仁明天皇ノ太子ナリ母ハ皇太后藤原氏○三年四月天皇太極殿ニ於テ即位○五月嵯峨皇太后橘氏崩ス后嘗テ弟右大臣公氏ト謀リ學館院ヲ建テ子弟ヲ教フ又檀林寺ヲ建ツ世檀林皇后ト稱ス○仁壽二年越前守高房卒ス高房魁梧多力天長中美濃介ニ任ス恩威並ニ行

ハル郡ニ妖巫アリ吏民ヲ誑惑スルヲ數十年高房之ヲ追捕ス國內清寧ナリ備後肥後越前ノ守ニ任ス皆治績アリ○冬參議小野篁薨ス篁少キキ父陸奥守岑守ニ從テ任ニ赴キ弓馬ヲ習フ嵯峨帝聞テ之ヲ惜ム乃チ節ヲ折テ書ヲ讀ム兼和五年事ニ坐シテ隱岐ニ流サル路ニ在テ謫行吟七十韻ヲ作ル人咸傳誦ス明年赦サレテ歸リ本官ニ復ス文章當時ニ冠絶シ尤モ草隸ニ妙ナリ嵯峨帝曾テ白居易ノ詩一聯ヲ書シテ篁ニ示ス篁其一字ヲ改ム正ニ原詩ト同シ帝大ニ賞嘆ス時ニ長慶集一部秘府ニ在リ世之ヲ見ル者無シ故ニ帝之ヲ以テ篁ヲ試

△、篁母ニ事テ孝公俸ニ十親友ニ施ス。○天安元年二月、右大臣良房ヲ以テ太政大臣ト爲ス、是レ入臣太政大臣ニ拜スルノ始ナリ、大友高市ニ皇子ノ外、古來此官ニ任スル者ナシ、道鏡ハ例文武帝ノ時ヨリ、知太政官事ノ名ヲ設ケ、皆親王ヲ以テ之ヲ爲ス、然レ太政官ノ事ヲ知ルト云意ニシテ、真ニ其官ニ任スルニ非ス、真ニ任スル者ハ良房ヨリ始ル、是ヨリ藤原氏世々太政大臣ニ任シ、終ニ外戚ヲ以テ朝權ヲ專ニスルニ至ル。○二年八月廿七日、天皇崩ス、壽三十三、帝心ヲ政事ニ留メ、性甚々明察、然レ禁網漸々密ニ、憲法頗ル峻ニシテ、吏人ノ廢置、相繼テ

己ムヲ無シ

○清和天皇 諱ハ惟仁

文德天皇第四ノ皇子ナリ、母ハ皇后藤原氏攝政良房ノ女。○天安二年十一月、天皇太極殿ニ於テ即位、年甫九歲、良房外祖ヲ以テ政ヲ輔ケ、事巨細ト無ク與カリ聞ク、初メ文德天皇帝ノ幼冲ナルヲ以テ、權リニ惟喬親王ヲ立ント欲ス、良房ヲ憚テ決セス、左大臣源信諫テ止ム、於是良房大ニ信ヲ德トス。○貞觀二年、帝始テ孝經ヲ讀ム。○六年正月、帝元服ヲ加フ、大江音人唐礼ヲ參酌シテ、其儀ヲ定ム、天子ノ冠礼此ニ始ル。○二月、帝良房ノ第二幸

シテ花ヲ賞シ、文士ヲ召テ詩ヲ賦セシム、良房又耕田ノ
禮ヲ行ハシメ、帝ヲシテ稼穡ノ艱難ヲ知シム、○八年、閏
三月、應天門火アリ、初メ大納言伴善男トモヨシヲ、左大臣源信フミヲト隙
アリ、信ヲ陷シテ之ニ代ラント欲シ、其子中庸等ト密カ
ニ應天門ヲ焚キ、誣奏シテ信ノ爲メ所トシ、兵ヲ遣テ其
弟ヲ圍ントス、良房馳セ至テ奏シテ曰、信定策ノ功アリ
誅ス可ラスト、既ニシテ事露ハレ、善男等ヲ鞠問シ罪ニ
伏ス、乃チ死一等ヲ減シ、善男父子及ヒ其黨紀豐城等ヲ
流ニ處ス、善男口辨アリ逢迎ヲ善クシ、仁明帝ノ爲ニ愛
セラル、性褊狹ニシテ好テ人ノ短ヲ斥ス、衆皆之ヲ惡ム、

肥後守紀夏井ハ豊城ノ兄ナリ、連坐シテ土佐ニ流サレ、
夏井温雅ニシテ才思アリ、初メ讃岐守ト爲リ、政化大ニ
行ハレ、吏民親愛ス、是ニ至テ肥後ヲ出ントス、百姓路ヲ
遮テ号哭シ、讃岐ヲ過ルキ老幼男女、道路ニ送迎シ、數十
里ノ間哭聲断ヘス、遂ニ配所ニ卒ス、○九年十月、右大臣
藤原良相薨ス、良相器宇曠寬、文學ノ士ヲ愛シ、大學生ノ
貧窶ナル者ニ、布帛ヲ贈リ、冬月ハ衣被ヲ給ス、又封戸ヲ
割テ崇親院ヲ建テ、宗族子女ノ自ラ存スルヲ能ハサル
者ヲ收養ス、○十一年、大納言氏宗等貞觀格ヲ上ル、○五
月、陸奥地震シ、山裂ケ海湧キ、死者千余人、○七月、肥後海

溢レ六郡ヲ漂没ス、○八月、太政大臣良房、參議善繩、續日
本後紀ヲ上ル、○十二年、參議春澄善繩薨ス、善繩性謹慎
時ニ諸博士互ニ相短長シ、弟子モ亦黨ヲ立ツ、善繩恬退
シテ門徒ヲ謝絶シ、謗議ヲ受ス、○十三年、二月、天皇紫宸
殿ニ御シテ夏ヲ視ル、文德帝以來此事瘥ス、是ニ至テ故
ニ復ス群臣皆悦フ、○右大臣氏宗等貞觀式ヲ上ル、○十
四年、五月、渤海來貢ス、大内記都良香ヲ接伴トス、良香博
學ニシテ文ヲ能ス、時ニ士習矜伐妍媸分タス、良香辨薰
藉論ヲ著シテ之ヲ刺ル、○九月、太政大臣良房薨ス、正一
位ヲ贈リ忠仁ト謚ス、良房貞觀八年ヨリ、敕ヲ受テ天下

ノ政ヲ攝行ス、藤原氏ノ攝政亦此ニ始ル、○十五年、惟喬
親王薨ス、親王ハ先帝第一ノ皇子ナリ、良房ノ故ヲ以テ
立ツトテ得ス、小野ニ閑居シ、歌咏自ラ樂ム、在原業平、紀
有常等時ニ至テ、陪游唱和スルノミ、薨ス年二十六、○十
八年十一月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、帝寬仁ニシテ風儀
端嚴、好テ書ヲ讀ミ心ヲ政事ニ專ニス、後ノ政治ヲ言フ
者皆貞觀ヲ稱ス、遜位ノ後、薙髮シテ戒ヲ持ス、元慶四年
十二月四日崩ス、壽三十一、
○陽成天皇 諱ハ貞明、
清和天皇、第一ノ皇子ナリ、母ハ中宮藤原氏、○元慶元年

正月、天皇豐樂殿ニ於テ即位甫、十歳右大臣藤原基經政ヲ攝ス、良房ノ故事ノ如シ。○二年夏、出羽ノ倭夷叛テ乱ヲ作ス、左近衛將監小野春風、右中辨藤原保則ヲ遣リ討テ之ヲ平ラク、初出羽ノ國民夷雜居シテ、土地膏腴、姦吏屢々、民ヲ困ム、秋田城司良岑某聚飲止マズ、夷種大ニ恨ミ、聚ル者數万人、攻テ其城ヲ燒ク、出羽守藤原興世拒キ戰テ屢々破ル、事京師ニ聞ユ、攝政基經之ヲ憂ヘ、保則ヲ延テ計ヲ問フ、保則具サニ方略ヲ陳ヘ、又春風カ將材ヲ薦ム、春風時ニ讒ニ逢テ官ヲ免ス、基經大ニ悦テ、保則ヲ以テ出羽權守ト爲シ、春風ヲ以テ鎮守將軍ト爲シ、

保則乃チ發ス、途ニ在テ屢々敗聞ヲ得、將士色ヲ失フ、保則自若ク、春風單騎ニシテ虜軍ニ入り、面諭シテ豪酋數十人ノ降シ、携テ國府ニ至ル、保則親ク之ヲ慰勞シ、其謀ヲ用テ渠帥二人ヲ斬ル、即チ使ヲ遣テ餘種ノ撫納ス、津輕ヨリ渡島ニ至ルマテ皆内附シ、奥羽悉ク平ラク、時ニ良岑ニ罰無ク、保則ニ賞無シ、世人基經ノ失政ヲ譏ル。○四年、基經ヲ太政大臣ト爲ス、○是歲、參議菅原是善薨ス、是善文學ヲ以テ著ル、基經ト文德實録ヲ撰テ之ヲ上ル。○七年春、渤海ノ使者裴迺來ル、文章博士菅原道真ヲ以テ、權リニ治部太輔ノ事ヲ行ハシメ之ニ接伴ス、裴迺

其詩ヲ稱シテ白居易ニ近シト爲ス、道真ハ是善ノ子ナ
 リ、幼ニシテ穎悟年甫テ十一、是善命シテ詩ヲ賦セシム、
 立トコロニ成ル是善嘆異ス、〇八年、二月太政大臣基經、
 天皇ヲ廢シテ時康親王ヲ立ツ、初帝稍長シテ嬉游度ナ
 ク、群小狎進ス、基經悉ク之ヲ逐フ然比悛メス、宮中ニ在
 テ犬猿ヲ鬪ハシメ、昔ニ迂フ者ハ劔ヲ拔テ之ヲ逐ヒ、或
 ハ人ヲ樹ニ上ラシメ之ヲ培テ殺ス、基經之ヲ憂ヒテ廢
 立ノ意アリ、基經營テ大饗ノ坐ニ於テ、時康親王ノ雅量
 アルヲ知リ、意ヲ親王ニ屬ス、是ニ至テ密ニ諸皇子ニ
 詣テ之ヲ見ル、諸皇子基經ノ至ルヲ聞テ咸修飾シテ出

テ見ル、最後ニ親王ニ詣ル、敝簾敗席、容止自若タリ、基經
 心ニ益々服シ密ニ推戴ノ意ヲ陳ス、因テ公卿ヲ會シテ
 之ヲ議ス、衆議紛紜タリ、參議藤原諸葛モロシメ劔ヲ按シテ曰、今
 日ノ事太政大臣ノ處分ニ違フ者ハ之ヲ斬ント、議乃チ
 定ル、基經乃チ帝ニ請テ陽成院ニ游ヒ、因テ遜位ヲ請フ、
 帝驚テ泣ク、時ニ年十七、後天曆三年、九月二十九日崩ス、
 壽八十二、

○光孝天皇

諱ハ時康

仁明天皇第三ノ皇子ナリ、母ハ女御藤原氏、基經公卿ヲ
 率テ勸進ス、〇二月、天皇太極殿ニ於テ即位、〇夏、恒貞親

王薨ス、初基經陽成帝ヲ廢シテ心ヲ親王ニ屬シ、其意ヲ陳ス、親王拒テ納レス。○帝紫宸殿ニ御シテ事ヲ視ル。○仁和元年、藤原佐世スケヲ大學頭ト爲ス、初メ佐世基經ノ家司タリ、薦テ大學生ト共ニ對策セシム、前文章博士都良香人ニ謂テ曰、藤原氏何ヲ求テカ得ザラン、今又此ノ如シ、吾輩ヲ何地ニ置ント欲スルヤト、佐世遂ニ及弟ス。○三年、信濃守橘良基卒ス、良基五州ニ歷任シ、治民ノ績當時ニ冠タリ、其子嘗テ治政ノ要ヲ問フ、曰、百術モ一清ニ如スト、卒スル及テ家ニ餘財ナシ。○三年、八月廿六日、天皇崩ス、壽五十八、初帝皇子多シ、基經ヲ憚テ、未タ太子ヲ

立テス、帝不預ナリ、基經臥内ニ入テ奏シテ曰、萬歲ノ後位ヲ誰ニ傳ヘン、帝曰、唯公之ヲ擇メ、基經曰、王侍從ニ如クハナント、定省親王ヲ謂フナリ、帝大ニ悦ブ、親王ヲ召シ、右ニ其手ヲ執リ、左ニ基經ノ手ヲ執テ、泣テ曰、大臣ノ功慎テ忘ルコト勿レ、尋テ崩ス。

○宇多天皇 諱ハ定省

光孝天皇第七ノ皇子ナリ、母ハ洞院皇太后。○三年、十一月、天皇太極殿ニ於テ即位、詔テ曰、萬機巨細ト無ク基經ニ關白セヨ、關白ノ職此ニ始ル。○四年春、詔シテ關白基經ヲ以テ三宮ニ準ス、去年帝位ニ即テ基經ニ詔シ、阿

衡ノ任ヲ以テ卿カ任ト爲ス可シノ語アリ、橘廣相ノ草
スル所ナリ、或謂テ曰、阿衡ハ位高シ事ニ預ラス、基經擇
ハスシテ曰、然ラハ則吾ハ閑人ノミト、命シテ厩馬ヲ放
タシメ、奏シテ曰、臣聞ク阿衡ハ職掌ナシト、其崇高知ル
可シ、臣ヲ以テ之ニ擬ス、恐クハ堪ユル所ニ非ス、然レ職
掌ナキノ地ニ居ルハ臣カ素志ナリト、帝大ニ驚キ詔諭
シテ曰、廣相詔ヲ草シ、朕カ本意ヲ失フ、朕舊ニ仍テ庶政
ハ皆公ニ関白シ、垂拱シテ成ヲ仰ト欲スルノミト、基經
乃チ詔ヲ奉ス、○九月、画工ニ敕シテ殷周以來名臣ノ像
ヲ紫宸殿ノ障子ニ圖セシム、画工ハ巨勢金岡也、○寛平

三年正月太政大臣基經薨ス、昭宣ト謚ス、○二月、讚岐守
菅原道真ヲ召テ藏入頭ト爲ス、道真上表シテ辭ス、聽カ
ス、○四年、菅原道真ニ詔シテ、類聚國史ヲ撰シム、○六年
參議菅原道真ヲ以テ遣唐大使ト爲ス、唐ノ乱ニ遇テ行
カス、道真上書シテ之ヲ罷シ、一ヲ請フ、遂ニ遣唐使ヲ罷
ム、○七年中納言道真ヲシテ囚徒ヲ録セシム、帝滯獄多
キヲ患ヘ此命アリ、○九年七月、天皇位ヲ皇太子ニ讓ル
帝書ヲ以テ新主ヲ誡ム、略ニ曰、賞罰ヲ明カニシ愛憎ニ
惑フヲ勿レ、喜怒ヲ慎テ色ニ形ハスヲ勿レ、婦言ヲ用ル
ヲ勿レ、小人ヲ舉ルヲ勿レ、治ヲ有識ニ詢ヘ、道ヲ六經ニ

求メヨ、帝嘗テ九月十三夜ヲ以テ月ヲ賞ス、後以テ故事ト爲ス、養平元年、七月十九日崩ス、壽六十五、

○醍醐天皇 諱ハ敦仁

宇多天皇ノ太子ナリ、母ハ贈皇太后藤原氏。○天皇太極殿ニ於テ即位、甫テ十三、大納言藤原時平、權大納言菅原道真、先帝ノ命ヲ以テ帝ヲ輔ケ、機務ヲ參決ス。○昌泰元年、帝群書治要ヲ讀ム、紀長谷雄侍讀タリ。○二年二月、時平ヲ以テ左大臣ト爲シ、道真ヲ以テ右大臣ト爲ス、道真儒家ヨリ起リ、台司ニ居ルヲ以テ、三夕ヒ表ヲ上テ之ヲ辭ス、聽ス、時ニ年五十五、時平二十八。○三年正月、帝朱雀

院ニ覬シ、法王ト相議シテ謂ラク、左右大臣並ヒニ朝政ヲ執ル、故ニ紛一ナル所ナシ、乃チ密カニ道真ヲ召シテ朝政ヲ關白シ、基經ノ故事ノ如ク爲シ、一ヲ論ス、道真固ク辭シテ受ス、且奏ス、今故無シテ臣ヲ召ス、人必ス疑ニ、乃チ詩ヲ賦シテ退久。○十月、文章博士三善清行辛酉革命ノ議ヲ上ル、時ニ道真權勢甚盛ナリ、清行又書テ道真ニ上リ、其退避ヲ勸ム、道真從ハス。○延喜元年正月、右大臣右近衛大将菅原道真ヲ貶シテ太宰權帥ト爲ス、初メ道真碩儒ヲ以テ殊遇ヲ受ケ、天下ヲ以テ已カ任ト爲シ、政務ヲ綜理ス、裁決流ル、カ如ク、海内景仰ス、時平年少

意甚タ不平ナリ、關白ノ密旨アルヲ聞ニ及テ益々悦ズ、源光、藤原定國、亦タ其下ニ立ツヲ愧ツ、藤原管根モ亦事ヲ以テ道真ヲ怨ム、時平因テ三人ト密ニ謀リ、誣構シテ曰、道真帝ヲ廢シテ、其女婿齊世親王ヲ立シテ謀ルト、帝之ヲ信シ遂ニ道真ヲ貶謫ス、法王大ニ驚キ、帝ヲ見テ申救セント欲シ、駕ヲ命シテ至ル、管根等門者ヲ戒メテ通セス、道真ノ男女廿三人皆配流セラル、天下之ヲ冤トス、○八月、時平等三代實録ヲ上ル、實録道真ノ定ル所多シ、其貶セララル、ヲ以テ名ヲ列セス、○三年、二月、右大臣菅原道真薨ス、道真五朝ニ歷仕シ、尤モ宇多帝ノ爲ニ

信任セラレ、終ニ大ニ用セラレ、配所ニ在ニ及テ門ヲ閉シ、出ス、文章ヲ以テ自ヲ遣ル、薨ス年五十九、後祠ヲ北野ニ建テ、之ヲ祀リ、天滿大自在天神ト曰ク、○五年、紀友則、紀貫之等、古今和歌集ヲ上ル、○九年、左大臣時平薨ス、時平權數多シ、帝朝臣ノ華奢ヲ患フ、時平密ニ奏シ、自ラ美服ヲ著テ入朝ス、帝伴ヲ怒ル、時平惶恐ニ退テ門ヲ閉ル、十月餘、時人相戒テ奢ヲ禁ス、○十四年、詔シテ直言ヲ求ム、式部大輔三善清行、意見封事ヲ上ル、其言五千餘言、時弊ニ切中ス、清行博ク史傳ニ涉リ、其實用ノ才、管相公ト相伯仲ス、藤原氏ノ爲ニ抑ヘラレ、大ニ其才用ヲ展ル

一ヲ得ス、后千四年ニシテ卒ス、年七十二、○延長元年、故
右大臣道真ノ官ヲ復シ正二位ヲ贈ル、道真薨後旱疫多
ク、時平、光管根、相繼テ逝キ、是ニ至テ皇太子暴ニ薨ス、世
以テ其崇ト爲ス、故ニ是命アリ、○五年、左大臣忠平等延
喜式ヲ上ル、忠平ハ時平ノ弟ナリ、道真ニ善シ、道真ノ賤
セラル、ヤ屢々之ヲ問遺ス、時人ノ之ヲ稱ス、○六年、少内
記小野道風ニ命シテ、歷代ノ名君賢臣ノ言行ヲ、清涼殿
ノ南廂ニ書セシム、道風ハ篋ノ孫ナリ、草隸ニ工ニ斤紙
隻字モ、人争テ之ヲ求ム、後世道風及ヒ藤原佐理藤原行
成ヲ稱シテ三蹟ト爲ス、○八年、六月、雷清涼殿ニ震ス、大

納言清貫、右中辨希世等震死ス、○九月、帝病篤シ、位ヲ皇
太子ニ禪ル、是月廿九日崩ス、壽四十六、帝臨御日久、精
ヲ勵シ治ヲ圖リ、群臣ヲ見ル毎ニ、温顔ヲ以テ之ニ接ス、
常ニ曰、威嚴外ニ形ハル、臣下言ヲ盡シ難シ、寒夜親シク
御衣ヲ脱シテ、以テ民間ノ苦ヲ省ス、世以テ仁徳帝ニ比
ス、後世ノ治ヲ言フ者必ス延喜ヲ稱ス、

○朱雀天皇 諱ハ寛明

先帝第十一ノ皇子ナリ、母ハ中宮藤原氏、○十月、天皇太
極殿ニ於テ即位、甫テ八歳、左大臣忠平攝政タリ、○義平
元年、京師盜多シ、吏ニ命シ、毎夜巡捕ス、○三年、南海道賊

起ル。○六年夏紀淑人ヲ以テ伊豫守ト爲シ、盜賊ヲ追捕
ス、叔人務テ流亡ヲ招キ困窮ヲ賑ハシ、衣食ヲ給シテ農
耕ニ就シム、南海平ラク、淑人ハ長谷雄ノ子也。○左大臣
忠平ヲ太政大臣ト爲ス。○天慶二年、平將門反ス、將門ハ
鎮守府將軍良持ノ子ナリ、勇悍ニシテ騎射ヲ善ス、少シ
テ攝政忠平ニ仕フ、嘗テ檢非違使タラントテ求ム忠平
聴カス、將門志テ下総ニ走リ、徒ヲ聚テ盜ヲ爲シ、伯父常
陸大掾國香ヲ攻テ之ヲ殺シ、又常陸介維幾ヲ執テ、武蔵
權守興世王、兇險乱ヲ喜フ、將門ニ説テ曰、一州ヲ取ルモ
誅セラレ、數州ヲ奪フモ誅ヤラル、誅ハ一也、阪東ニ割據

シテ覇ヲ圖ル一如スト、將門大ニ喜フ、遂ニ下野上野ヲ
攻テ國守ヲ逐ヒ、武蔵相摸ト總ヲ降シ、府ヲ下総ノ猿島
ニ開キ、百官ヲ署シ、僭号シテ平新王ト稱ス、初メ將門京
師ニ在リテ藤原純友ト善シ、嘗テ同ク比叡山ニ登リ、帝
都ヲ見テ共ニ叛ヲ謀リ、之ニ謂テ曰、吾ハ王族ナリ、天子
ト爲ン、卿ハ藤原氏關白ト爲ル可シ、是ニ至テ純友伊豫
掾タリ、任滿テ還ラス、兵ヲ起シテ遙ニ將門ニ應シ、潛カ
ニ兵士ヲ遣テ火ヲ東西京ニ放ツ、京師騷擾タリ、○三年
二月、參議藤原忠文ヲ以テ、征東大將軍ト爲シ、將門ヲ討
チ、小野好古ヲ以テ、山陽道ノ追捕使ト爲シテ純友ヲ討

○三月、常陸掾平貞盛、下野押領藤原秀郷、將門ヲ討テ之ヲ誅ス、貞盛父國香ノ仇ヲ報セント欲シテ朝廷ニ訴フ、乃常陸掾ヲ授テ將門ヲ討シム、將門之ヲ聞キ兵ヲ率テ常陸ニ入り、貞盛ヲ索ム、遂ニ得ス、乃チ下總ニ歸リ兵士ヲ散ス、貞盛之ヲ伺ヒ秀郷ト兵ヲ率テ之ヲ襲フ、將門大ニ敗レ、退テ島廣山ヲ保ツ、貞盛秀郷火ヲ縱テ其營ヲ燒ク、將門常ニ精兵八十ヲ以テ自ヲ衛ル、時ニ兵未夕集ラス、殘兵僅ニ四百餘拒戰甚カム、官軍少ク卻ク、貞盛秀郷衆ヲ督シテ大ニ戰ヒ、遂ニ之ヲ破ル、將門單騎ニシテ陣ヲ突ク、貞盛射テ之ヲ斃シ、秀郷其首ヲ斬ル、興世王以

下黨與皆誅ニ伏ス、初秀郷將門ノ事ヲ舉ルヲ聞キ往テ之ヲ見ル、將門方ニ髮ヲ理ス喜テ出テ迎フ、已ニシテ食ヲ設ク、飯粒袴ニ落ツ、將門自ラ拂拭ス、秀郷謂ラク輕躁此ノ如シ、大事ヲ濟スニ足ラスト、遂ニ貞盛ト力ヲ戮セ討テ之ヲ誅ス、貞盛秀郷ヲ從四位下ニ叙シ功田ヲ賜フ、○五月、忠文清見關ニ至ル賊平クト聞テ途ヨリ歸ル、○八月、讚岐介藤原國風シニカヒ、賊帥藤原恒利ツネトシヲ招キ降シ、以テ鄉導トナシ賊ノ巢窟ヲ衝ク、純友敗レテ太宰府ニ走ル、明年夏攻テ太宰府ヲ陷レ、周防土佐ヲ侵シ、賊勢復々振ス、好古精銳ヲ率ヒ源經基、大藏春實等ト、海陸ヨリ之ヲ攻

博多津ニ戰フ、春實先鋒ト爲リ戰尤モカム、賊敗レテ
海ニ入ル、好古追擊シテ賊船ヲ燒キ、殺溺殆ニト盡ク、純
友逃レテ伊豫ニ還ル、警固使橘遠保逆ニ擊テ之ヲ斬リ、
首ヲ京師ニ傳フ、○朝廷軍功ヲ論賞ス、衆議シテ曰、忠文
モ亦褒典ニ與ルヘシ、藤原實賴其功無キヲ以テ可カス
其弟師輔曰、功ナシト雖モ勞無シト爲サス、實賴遂ニ聽
カス、○九年四月、天皇位ヲ皇太弟ニ禪ル、帝性寛仁、關白
忠平嘗テ奏シテ曰、外議謂ラク時政寛ニ過クト、帝曰、朕
之ヲ先帝ニ聞ク、公ノ先人言ルヲ有リ、政ハ琴ヲ張ルカ
如シ、大弦急ナレハ、小弦絶ス、朕若シ嚴急ナルハ、下民

何ヲ以テ堪ント、天曆六年、八月十五日崩ス、壽三十、

